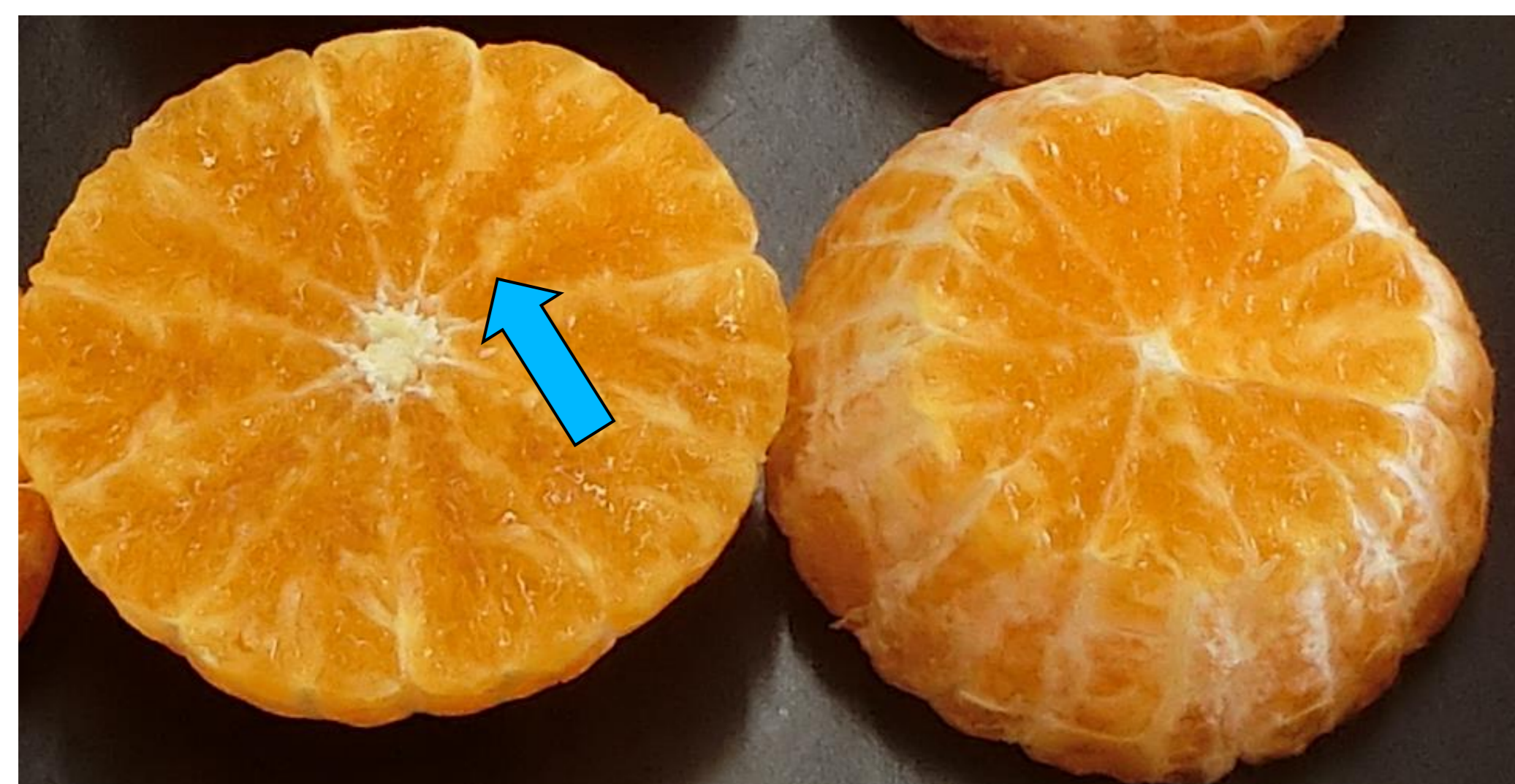


‘愛媛果試第48号’のす上がり対策

‘愛媛果試第48号’は、一部の果実です上がりがみられる。す上がり果は、外観からの判別が難しいため、発生している可能性が高い内すそや着色が遅れる果実を摘果して混入を防ぐ。また、立ち気味の樹で発生が多い傾向があるため、樹間を広くとって適宜誘引しながら横枝の確保に努める。

す上がりの特徴

粒化症や凍害のす上がりとは異なり、果芯部まで発生するす上がりが一部で見られる。成熟に伴うものではなく、生育の早い段階から既に発生している可能性が高い。発生部位は内すそに多い傾向。



じょうのう膜に沿って果芯部まで発生



8月下旬での発生状況

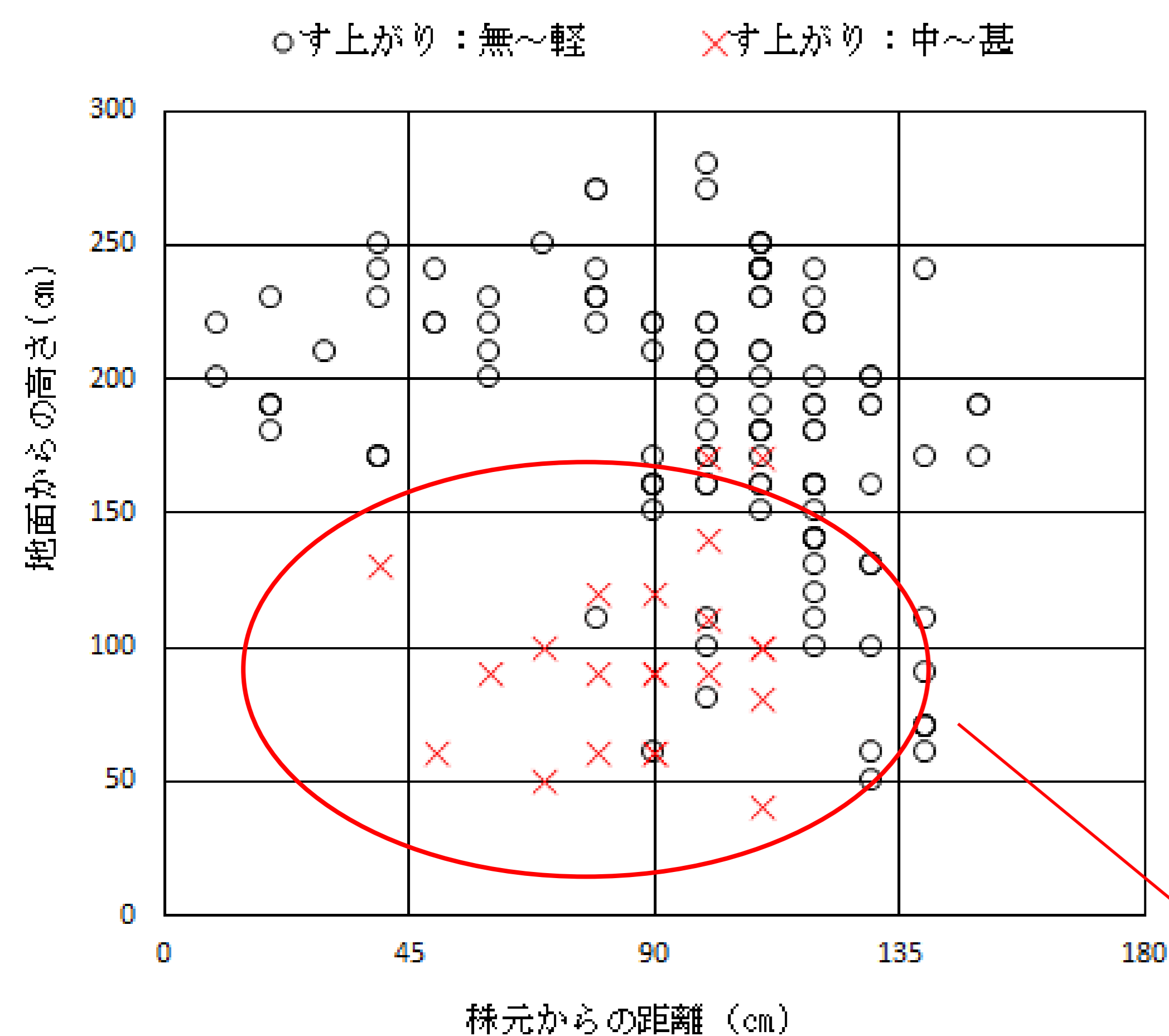


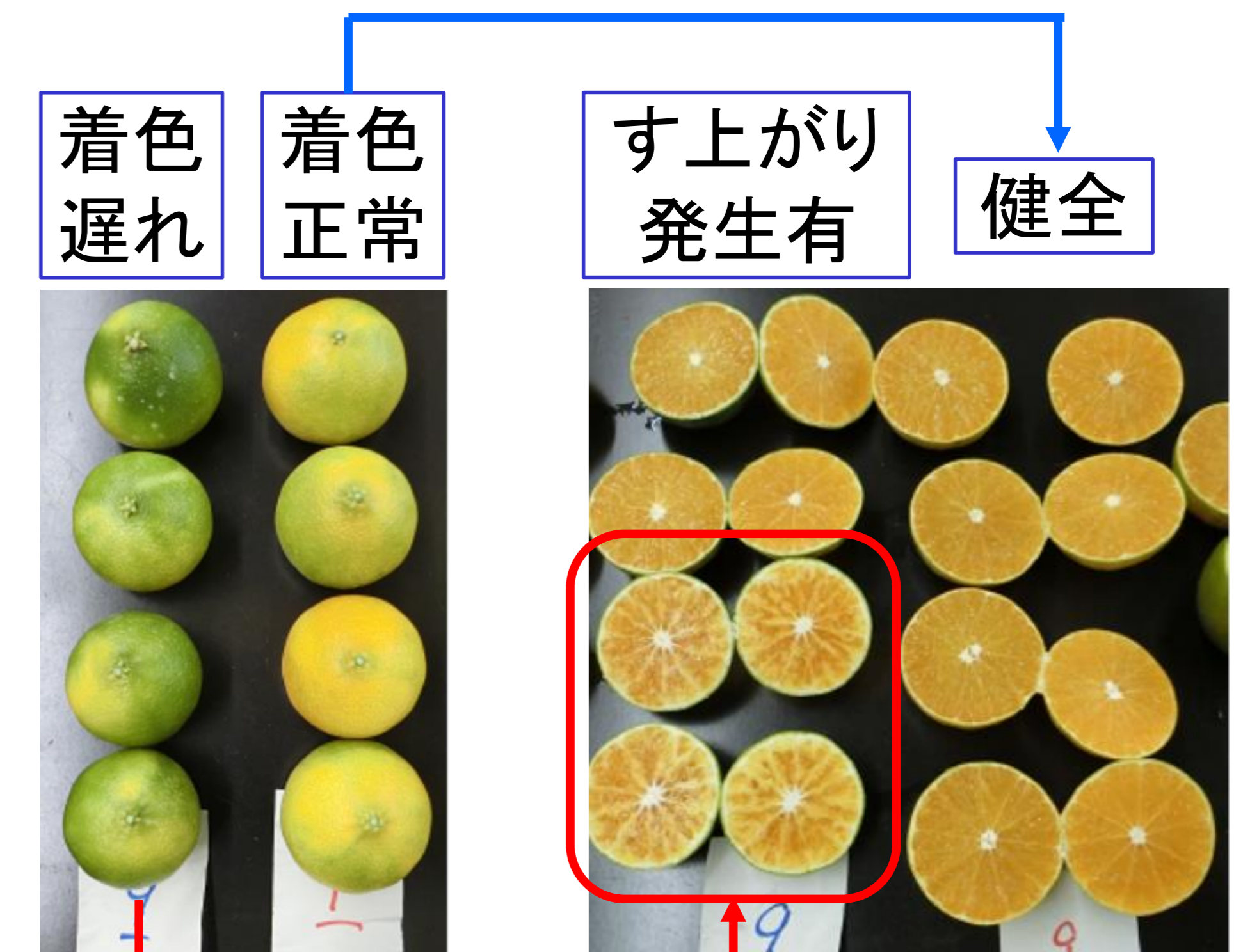
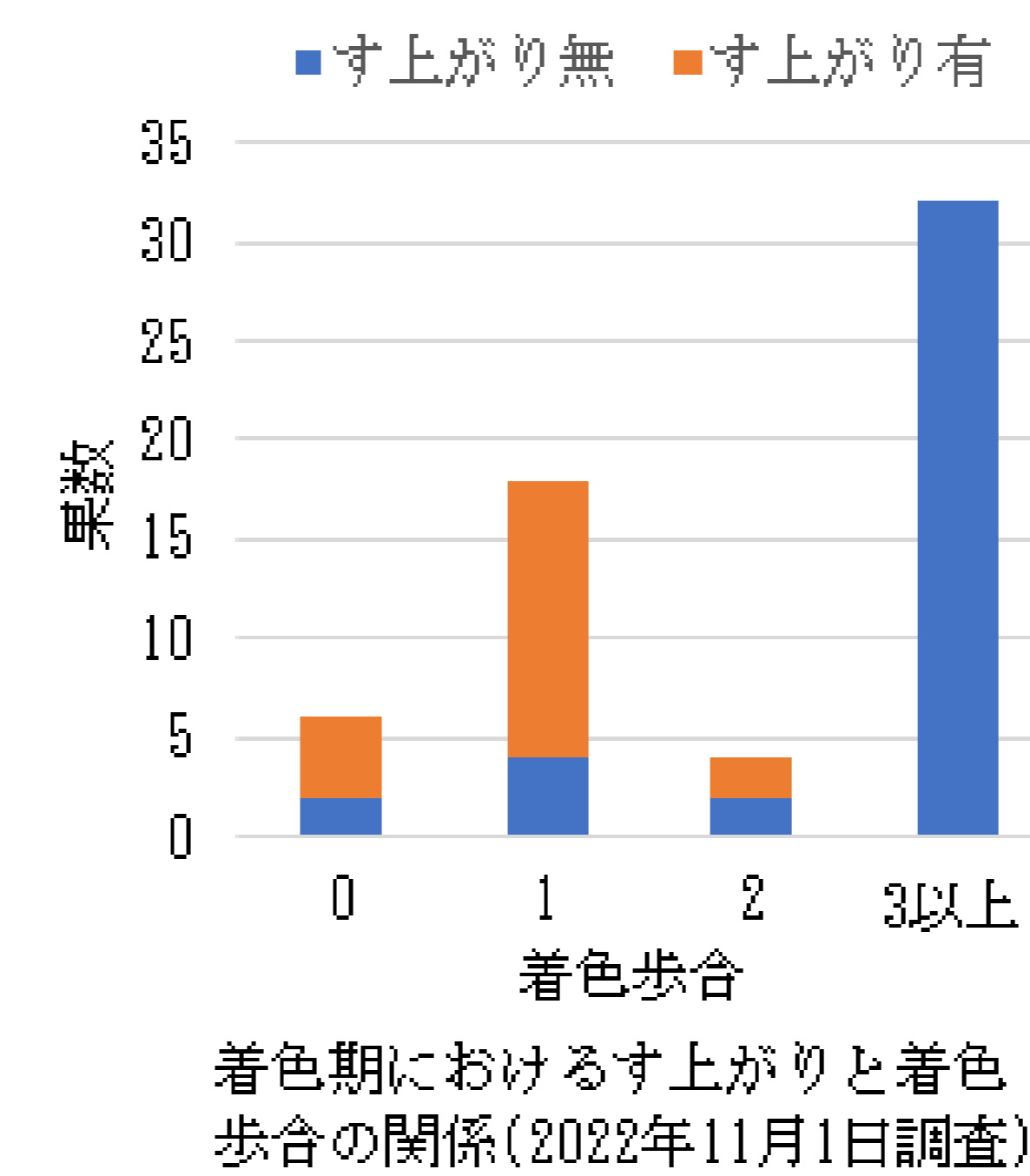
図 す上がり程度と着果部位の分布



樹冠下部、内成りに多い傾向。内すその摘果を徹底して混入を防ぐ。

着色期の樹上選果

着色期に着色が遅い果実はす上がりの可能性が高い。内すそを中心に着色が遅れる果実は、糖度も低いので樹上選果を兼ねて除去する。



樹形による違い

立ち気味の樹です上がりの発生が多い傾向がみられ、頂芽優勢が強い品種のため、養分競合が発生要因と推察される。上部に養分が集中しないよう樹間を広くとって立枝の間引きや誘引により横枝の確保に努める。



開帳気味のA樹はす上がり無
立ち気味のB樹はす上がり有

【A樹】
支柱により主枝を誘引し、徒長枝は横枝に利用しながら、開き気味とした樹。上部からの強い新梢の発生はみられない。
【B樹】
主枝を誘引しなかったため立枝が自然と真上に強く伸長し、立ち気味となった樹。